



汉日对比语言学研究會◎編

汉日语言对比 研究论丛

· 第 6 辑 ·



华东理工大学出版社



汉日对比语言学研究會◎編

汉日语言对比 研究论丛

· 第 ⑥ 辑 ·



華東理工大學出版社
上海

图书在版编目(CIP)数据

汉日语言对比研究论丛.第6辑/汉日对比语言学会编. —上海:
华东理工大学出版社,2015.8

ISBN 978-7-5628-4340-5

I. ①汉… II. ①汉… III. ①汉语-对比研究-日语-文集 IV. ①H1-53②H36-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2015)第 167641 号

汉日语言对比研究论丛 (第 6 辑)

编 者 / 汉日对比语言学会

责任编辑 / 王一佼

责任校对 / 成 俊

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地 址: 上海市梅陇路 130 号, 200237

电 话: (021)64250306(营销部)

(021)64250875(编辑室)

传 真: (021)64252707

网 址: press.ecust.edu.cn

印 刷 / 常熟市华顺印刷有限公司

开 本 / 787mm×1092mm 1/16

印 张 / 12.75

字 数 / 309 千字

版 次 / 2015 年 8 月第 1 版

印 次 / 2015 年 8 月第 1 次

书 号 / ISBN 978-7-5628-4340-5

定 价 / 58.00 元

联系我们: 电子邮箱 press_wy@ecust.edu.cn

官方微博 e.weibo.com/ecustpress

天猫旗舰店 <http://hdlgdxpbs.tmall.com>



汉日语言对比研究论丛

2015·第6辑

顾问:(按汉语拼音顺序排列)

柴谷方良、村木新次郎、工藤真由美、刘丹青、木村英树、杉村博文、沈家煊、
韦斯利·马克·雅各布森、影山太郎、袁毓林、修刚

主编:张威

副主编:(按汉语拼音顺序排列)

林璋、彭广陆、于康、张辉

本辑执行主编:翟东娜

本辑执行副主编:俞晓明、张岩红

本辑执行主编助理:张北林

编委:(按汉语拼音顺序排列)

曹大峰(北京外国语大学)	谯燕(北京外国语大学)	徐一平(北京外国语大学)
陈访泽(澳门大学)	邱根成(上海对外经贸大学)	许宗华(洛阳外国语大学)
陈端端(厦门大学)	盛文忠(上海外国语大学)	杨凯荣(东京大学)
陈力卫(成城大学)	施建军(北京外国语大学)	于康(关西学院大学)
陈岩(大连外国语大学)	唐磊(教育部教材课程研究所)	于乃明(台湾政治大学)
戴宝玉(上海外国语大学)	王婉莹(清华大学)	俞晓明(北京语言大学)
高宁(华东师范大学)	王忻(杭州师范大学)	翟东娜(北京师范大学)
侯仁锋(县立广岛大学)	王学群(东洋大学)	张厚泉(东华大学)
揭侠(南京国际关系学院)	王亚新(东洋大学)	张建华(上海交通大学)
李长波(同志社大学)	王轶群(中国人民大学)	张麟声(大阪府立大学)
林璋(福建师范大学)	吴大纲(上海外国语大学)	张佩霞(湖南大学)
卢涛(广岛大学)	毋育新(西安外国语大学)	张威(中国人民大学)
马小兵(北京大学)	修德健(中国海洋大学)	张岩红(大连外国语大学)
欧文东(国际关系学院)	续三义(东洋大学)	赵刚(西安交通大学)
潘钧(北京大学)	许慈惠(上海外国语大学)	赵华敏(北京大学)
彭广陆(东北大学)	徐曙(上海对外经贸大学)	朱春跃(神户大学)
朴贞姬(北京语言大学)		朱京伟(北京外国语大学)

本辑审稿专家:(按汉语拼音顺序排列)

曹大峰、陈访泽、高宁、林璋、马小兵、欧文东、潘钧、彭广陆、朴贞姬、谯燕、
施建军、唐磊、王婉莹、王忻、王轶群、吴大纲、毋育新、徐曙、徐一平、续三义、
许宗华、杨凯荣、于康、张麟声、张佩霞、张威、赵华敏、朱京伟

前 言

近年来,我国汉日对比语言学研究蓬勃发展,无论在研究视角或者分析的深度方面,与以前相比都有了明显改观。自2009年汉日对比语言学研究(协作)会成立以后,我们一直重视学术的建设与发展,坚持每年召开一届大型国际研讨会,并连续出版了5辑《汉日语言对比研究论丛》,从一个侧面比较充分地展示了我国汉日对比研究领域的发展动态及最新的研究成果。自第4辑起,《汉日语言对比研究论丛》正式被指定为汉日对比语言学研究(协作)会的会刊。

现在,《汉日语言对比研究论丛(第6辑)》又要与读者见面了。为了使《汉日语言对比研究论丛》能够与时俱进,进一步提高它的学术层次和出版质量,本学会经研究决定自2015年起正式实施与华东理工大学出版社联手共同建设和培育这个已经在我国汉日对比语言学界获得广泛认可且具权威性的学术平台的计划,并将尽早入围全国核心集刊作为努力的目标,以便为全国汉日对比语言学界的广大同仁提供能够进入国家学术评估体系的高层次、高质量的学术成果发表平台。

为此,自第6辑开始,《汉日语言对比研究论丛》将由每年出版1辑改为每年出版2辑;出版单位也由迄今为止的北京大学出版社改为华东理工大学出版社。改版后的《汉日语言对比研究论丛》仍作为汉日对比语言学研究(协作)会的会刊,每辑收录的论文数量限定在15篇左右。同时,对在本刊采用的论文质量也要从严要求,严格履行匿名评审程序,只有在专家审稿通过后方可刊用。本研究会还为改版后的《论丛》成立了一个编委会和审稿专家团队,编委会成员的任期相对稳定,不受学会换届的影响。出版社和学会将在本《论丛》编辑出版的每个环节各司其职,严格把关,尽全力确保被采用论文的学术层次和出版质量。我们也衷心地期待和欢迎广大会员会友以及学界同仁共同监督、关注和支持我们做好此次会刊的改版工作。

不言而喻,作为一个学会要实现以上既定目标,离不开全体会员、会友和广大学界同仁的理解、支持和积极参与。我们希望大家今后踊跃为本刊投稿,把最优质的研究成果发表在我们这个刊物上。众志成城,滴水穿石。为尽早把我们的会刊培育成名副其实的“全国核心集刊”而加倍努力!

最后,我谨代表汉日对比语言学研究(协作)会和《汉日语言对比研究论丛》编委会,向一直以来为本刊提供大力支持的北京大学出版社和今后与我们共同实施建设和培育全国核心集刊出版项目的华东理工大学出版社表示最诚挚的感谢。“世界上怕就怕认真二字”。只要我们一步一个脚印坚持不懈地努力下去,我们的目标就一定能够实现。

主编 张威

2015年7月5日

版权声明: 作者投稿或接受本论丛编委会约稿,即视为遵守汉日对比语言研究会与本社关于本论丛出版合同之约定,同意授予我社该作品的专有许可使用权,包括但不限于该作品的专有出版权、复制权、发行权和电子与网络传播权。

目 录

特约论文

- 時間的限定性と「ノダ」文—<かたり>のテキスト構造を中心に— …… 工藤真由美(1)
汉英日韩接近性副词和相关格式的句法语义比较 …… 袁毓林 郑仁贞(20)

汉日对比语言研究的多样性——选题、方法与成果

- 汉日语音对比及日语语音习得研究——选题、方法与成果 …… 朱春跃(35)
《译书汇编》(1900—1903)中的二字日语借词 …… 朱京伟(48)
再议日语「カキ料理構文」的句式特征——兼及与其对应的汉语句式 …… 王亚新(61)
翻译、翻译研究与语言对比研究 …… 林 璋(74)
近四十年来的汉日对比研究综述——以礼貌现象为焦点 …… 毋育新(84)

语法研究

- 汉日语中“场所”和“空间”的认知差异——以“空间词”的使用和不使用为例 … 陈 风(96)
从语言经济性原则看汉日鳗鱼句的异同点 …… 陈访泽 黄怀谷(109)
“VP的”与「VPの」的指称性质对比
——以“VP的是NP”与「VPのはNPだ」为例 …… 陈洁羽(118)

词汇研究

- “性向词汇”的汉日对比研究
——以“做事快、很得要领的人”为例 …… 施 晖 栾竹民(130)

语用研究

- 集体讨论中话语标记的汉日对比研究 …… 孙 莉 赵 刚 贾 琦(141)
“诉苦表达”的汉日对照分析——以网络上对宾馆的差评为例 …… 张惠芳 顾心玉(153)

教学研究

- 中国語話者の母語の知識は日本語学習にどの程度役立つか—「的」を例に—
…………… 庵功雄(165)
中国人学習者による日本語母音の発音再考 …… 寺田昌代(174)

- 编后记 …… (190)
1—5 辑索引 …… (191)
《汉日语言对比研究论丛》来稿注意事项 …… (196)
汉日对比语言学研究(协作)会第三届常务理事会机构组织名单 …… (198)

時間的限定性と「ノダ」文 —〈かたり〉のテキスト構造を中心に—

工藤真由美

The Temporal Localization and Noda-form Sentence in Narrative Texts

Mayumi Kudo

[提 要] 写日语文章时,需要恰当地使用 noda 句。本文针对如何写出恰当的文章这一实用性课题,讨论以下三点:①什么情况下必须使用 noda 句;②什么情况下不能使用 noda 句;③什么情况下使用或不使用 noda 句均可,此时使用 noda 句会带来何种语体效果。另外,本文还将说明我们有必要在多个句子有机衔接的语篇结构(文章结构)中,从与无标记形式“~ suru”句对立关系的角度对有标记形式“~ suru noda”句进行分析。

[关键词] 语篇的类型(会话、叙述);语篇的逻辑结构(解释的结构);noda 强制性的有无;时间限定性(现实的一次性事象、潜在的恒常性事象);语篇的时间结构(相继发生、同时发生);体(完整、持续)

Abstract: The temporal localization is a grammatical category that expresses the episodic/generic(habitual) distinction. The fundamental notion of the temporal localization is not a local—semantic one but is discourse—pragmatic. In a narrative text(narrative parts of a novel), a generic(habitual) sentence is never used to describe an event or a state as such, but rather appears to provide background or setting information. The generic(habitual) sentence has the explanatory function. That is why noda—form of the generic(habitual) sentence is unnecessary.

Key words: temporal localization(時間的限定性); narrative parts of a novel(小説の地の文); noda—form sentence(ノダ文); explanation(説明); temporal sequence(時間的継起)

1. はじめに

「ノダ」形式を伴う文に関しては、様々な研究が積み重ねられてきており、次のような

「ノダ」文が、前文が表す事象の実現を条件づける事象を提示する、つまり〈原因の説明〉という意味機能を有することは既に指摘されているところである。

・「何ともないね」

言い終わったとたん僕は跳びあがった。徳丸が僕の脇腹に爪をたてたのだ。

(石川達三: 僕たちの失敗)

「ノダ」文に、このような、前文が表す事象に対する原因あるいは理由の提示(説明)という意味機能があることに間違いはない。が、「ノダ」文にしかこのような意味機能がないか、ということそうではないであろう。次の場合、「堪能であった」という、「ノダ」を伴わない無標形式の文ではあるが、前文が表す事象の実現を条件づける事象の提示(原因・理由の説明)という意味機能がある。

・そのあと東郷は長官公室でネボガトフたちと会見した。

通訳には、真之の先輩のなかでかれともっとも親しい一等巡洋艦浅間の艦長八代六郎大佐があたった。八代は明治28年から4年間ペテルブルグの駐露公使館付武官をしていてロシア語に堪能であった。

(司馬遼太郎: 坂の上の雲)

従って、「堪能だった」を「堪能だったのである」に言い換えることができる。このような場合、「ノダ」形式でも無標形式でも、そのテキスト(text)構造(文と文の有機的つながり)は変わらない。

一方、「爪をたてたのだ」を「爪をたてた」に言い換えることはできず、三上(1953)も指摘しているように、言い換えれば、2つの事象間の時間関係が変わり、テキスト構造が違ってくる。

・言い終わったとたん僕は跳びあがった。徳丸が僕の脇腹に爪をたてたのだ。

<後続=結果(条件づけられ)>

<先行=原因(条件づけ)>

・言い終わったとたん僕は跳びあがった。徳丸が僕の脇腹に爪をたてた。

<先行>

<後続> → 【出来事の生起順】

ここで問題になるのは、「ノダ」形式の義務性の有無である。これを明らかにするためには、複数の文の有機的つながりであるテキスト構造のなかで、有標の文「～シタノダ」を、無標の文「～シタ」との対立関係のなかで分析しなければならない(奥田(1990)参照)。単純に言ってしまうと、この2つの文の使い分けの問題である。この点に関しては、従来突っ込んだ考察がなされていないように思われる。

「ノダ」形式を伴う文

無標形式の文

爪をたてたのだ(のである) ⇔

爪をたてた

堪能だったのだ(のである) ⇔

堪能だった

2. 問題のありか

次の(a)と(b)の例における「ノダ」文を比べられたい。ただちに分かることは、(a)の場合と違って、(b)の「ノダ」は無くてもよいということである。特に「老舗なのである」は「老舗である」の方が簡潔であるという印象さえ受ける。(以下、述語にのみ下線を引く場合がある)

(a1) 誠吉は六本木に向かった。クリスマス・イブの夜、絹子に誘われて入ったバーの経営者が、マンションの持ち主だったということを思い出したのだ。

(樹下の想い)

(a2) ドアが開き、伊予警務部長が顔の肉を揺らして跳び込んできた。隣の四号にいて、マジックミラーで一部始終を見ていたのだ。

(半落ち)

(b1) 食後、誠吉は洗面所に立ち、薬を飲んだ。沖田医師が出してくれた経口モルヒネを、12時間おきに飲んでいるのである。抗癌剤は一日で止めにした。吐き気に襲われ、とても仕事にならなかったからである。

(樹下の想い)

(b2) 「めしがあるかな」

と、茶店に入るなり、松山なまりで小女にいったために、返事してもらえなかった。この茶店は「藤の木茶屋」とよばれて江戸のころからの老舗なのである。団子を売る茶屋で、めしは売らなかった。その団子のきめのこまかさから羽二重団子とよばれて往還を通るひとびとから親しまれている。

「団子ならありますよ」

と、小女がいった。

(坂の上の雲)

(a)の2つの例のテキスト構造は次のようになっている。

	「前文」	「ノダ」文
	向かった	思い出したのである
	跳び込んできた	見ていたのだ
時間的生起順序	<後続>	<先行>
因果関係	<結果(条件づけられ)>	<原因・理由(条件づけ)>

このようなテキスト構造の場合には、「ノダ」形式の代わりに、無標形式を使用することはできない。「思い出した」にすると、前文が表す事象に、時間的に後続することになり、時間構造がまったく違ってしまふ(因果関係もなくなる)。また「見ていた」にすると、前文が表す事象との(誰か別の人間の)同時性を表すことになり、2つの事象間の因果関係も無くなる。この場合は、「ノダ」文と無標形式の文を厳密に使い分けなければならない。

一方、(b)の2つの例は、どちらも「ノダ」が無くてもよい。「ノダ」の有無に関わらず、前文が表す事象「薬を飲んだ」「めしを頼んだが返事をしてもらえなかった」に対する<背景の説明>の機能がある。前者では、「薬を飲んだ」のはその時限りの偶発的な事象ではなく規則的な反復習慣によって条件づけられているという説明、後者では、「めしを頼ん

だが返事をしてもらえなかった」のは、「(団子を売る)老舗である」ことに条件づけられているという説明がなされている。

このような「ノダ」形式の義務性の有無の違いには、次のような時間的限定性の有無が相関していると思われる。(名詞述語が表す<質>とは<特性の束>のことを言う。奥田(1988)、工藤(2014))

(a)「思い出したのだ」「見ていたのである」

時間的限定性のある特定時の個別具体的な(レアル(real)な一時的)事象

(b)「飲んでいるのである」「老舗なのである」

時間的限定性のないポテンシャル(potential)な事象:<反復習慣(動詞述語)><質(名詞述語)>

従って、時間的限定性のない<反復習慣><特性><質>を表す場合には、次のように「ノダ」がない場合が多い。時間的限定性がないポテンシャル(potential)な事象は、前文が表す事象の実現を条件づける<背景的説明>としての機能を有するからである。従って、「ノダ」形式の使用は任意ということとなる。(以下の例は、すべて「呼んでいたのだ」「早いのである」「世界なのだ」に変えてもテキスト構造は変わらない)

(b)<反復(動詞述語)>

・「兄さん、いらっしゃい」

とお延は正太に挨拶した。従兄妹同士の間ではあるが日ごろ正太のことを「兄さん、兄さん」と呼んでいた。(家)

<特性(形容詞述語)>

・風越の怒りは消え、みずみずしい元気がよみがえってきた。もともと、風越は気分の転換が早い。風越は、大きく手をふって歩きながら、しゃべった。

(官僚たちの夏)

<質(名詞述語)>

・(前略)風越もまた、手をあげ、会釈した。秘書課の部屋に戻る。登退庁ランプは、大臣の他、3つほど消えているだけで、まだほとんどの幹部が在庁していることを示していた。ここは、半ドンさえない世界である。(官僚たちの夏)

以上の事実は、次のことを示していると思われる。

①説明のテキスト構造において、「ノダ」形式が義務的な場合とそうではない場合がある。

②これには、文の対象的内容における時間的限定性の有無が相関している。時間的限定性のある一時的なレアルな事象の場合には、<継起><同時>という時間関係のなかで事象が<記述描写>されることになるが、思考による一般化がなされている時間的限定性のない事象においては、このような時間関係は生じず、記述描写ならぬ<背景的説明>という機能がでてくる。そして、時間的限定性のある事象において「ノダ」を伴う文

が使用される場合には、＜継起＞＜同時＞という時間関係が変わることになるが、時間的限定性のない事象においては、「ノダ」が使用されても＜背景的説明＞の機能に変化はない。

- A 時間的限定性有：一時的なリアルな事象の記述描写＝＜継起＞＜同時＞という事象間の時間関係有
- B 時間的限定性無：時間の抽象化が進んだポテンシャルな事象＝背景的説明

③従って、まずは、無標形式の文が表す事象の時間的限定性の有無が、複数の事象の有機적つながりであるテキスト構造にどうかかわっているかを確認した上で、「ノダ」を伴う文の義務性の有無とその意味機能を考察する必要があると思われる。

ここでは、小説の地の文＜かたり＞に限定して考察する。話し手と聞き手の相互行為としての＜はなしあい＞における「ノダ」文は、使用頻度が高いだけでなく、無標形式との使い分けには様々な要因が絡んでいる。それに対して、小説の地の文のようなくかたり＞では、「ノダ」文と無標形式の文の使い分けに一定の限定化が起こっていると思われる(奥田(1990,2001)参照)。従って、まずは、＜かたり＞のテキスト構造に限定して、無標の文と対立して「ノダ」文がどのような機能を果たすのかを考察することにしたい。(従って、「～ノダ(ノデアル)」と「～ノダッタ(ノデアッタ)」の違いも考慮に入れないでよいと思われる)なお、＜はなしあい＞の場合との共通性が高まる、作中人物の内的独白およびそれに近い場合は外しておく。

以下では、まず、無標形式の文によるテキスト構造を確認した上で、「ノダ」文によるテキスト構造を考察する。

3. 時間的限定性とそのテキスト的機能(無標形式の文)

無標形式の文(「ノダ」を伴わない文)が構成するテキスト構造を、＜時間的限定性＞のある場合とない場合に分けて、見て行く。時間的限定性のある場合では、＜継起＞＜同時＞かの時間関係が重要になる。特に、＜かたり＞のテキストでは、完成相が表す＜継起＞の時間構造は、ものがたりを前進させる機能を有する点で重要である。

3.1 時間的限定性のある場合

3.1.1 完成・継続のアスペクト(aspect)対立と継起・同時の時間関係(タクシス、taxis)

運動動詞における完成と継続のアスペクト対立は、継起、同時という複数の事象間の時間関係の違い(タクシス)と関連している。次の場合、すべて、時間的限定性のある個別具体的なリアルな事象である。出来事自身が物語るかのように、iconicに描写記述されている。(幼い子供の作文に見られるように、＜継起＞は、現実世界における事象の生起順序に即した、最も原初的なアイコンニックな提示である)時間的限定性のある一時的な事象では＜事象間の時間関係＞が重要になる。物語の時間の流れを前進させる＜完

成＝継起＞と、時間の流れをとめる＜継続＝同時＞の時間構造が形成されるのは、時間的限定性のある動的事象においてである。動的事象の生起順序に即して描写記述される場合には、基本的に「ノダ」は使用されない。

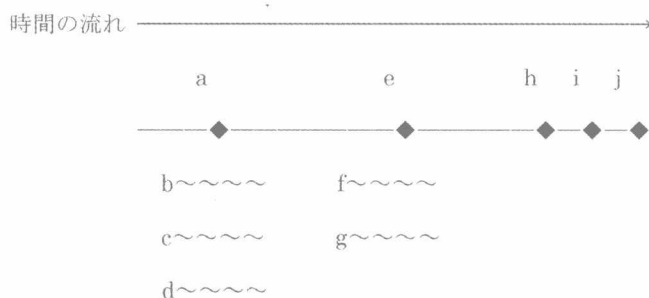
彼は追われるように崖に近い岩陰にとびこんだ。その狭い空間には多くの兵と住民たちが身をかがめていた。兵の一人が子供を抱いた女に銃をつきつけていた。

「いいか、子供が泣いたら殺すぞ」女は機械的にうなずきつづけていた。

そのうちに、ふと笑うような泣きむせぶような低い声が背後で聞こえた。振り向くと銃をつきつけられた女が唇をふるわせている。女のかたくにぎりしめられた両掌の間には嬰兒の首がしめつけられていた。

「馬乗りがはじまった」駆け込んできた兵が血の気の失せた顔で叫んだ。そして「ここにも敵が来るぞ」と言った。住民も兵もおびえたように立ち上がった。

(殉国)



最後の2文における「言った」と「立ち上がった」の間には、継起という時間関係だけでなく＜因果関係(条件づけ・条件づけられの関係)＞も複合化されている。従って、＜継起＞＜同時＞の時間構造には、因果関係が関与している場合も関与していない場合もあるのだが、因果関係がある場合でも、時間の流れに沿った＜原因(きっかけ)→結果＞の順序である。このような場合、基本的に「ノダ」形式を使用することはできない(「ノダ」文が使用される特別な場合については後述)。

3.1.2 完成相と継起性

「ノダ」形式の義務性の有無には、＜継起＞か＜同時＞かという時間関係が大きく関わっているため、ここで＜継起＞の場合と＜同時＞の場合をわけて確認しておく。次の例は、出来事的生起順序に従った描写記述である。「当たった」と「取り落とした」の間には継起関係だけでなく因果関係も複合化されているが、「ノダ」文は使用できない。

・マイクが答えた直後、階艦隊の方角から狙い定めた一弾が飛来した。狙撃弾は狙い誤たず、かおりを楯にしていた黒住の、わずかに現れていた左肩に当たった。

狙撃の衝撃に耐えられず、黒住はよろめいて銃を取り落とした。
そこを逃さず、混同と富田が躍りかかった。(棟居刑事の「人間の海」)

「ノダ」文を使用する場合には、順序を変えて、次のようなテキスト構造にしなければならない。

・マイクが答えた直後、階艦隊の方角から狙い定めた一弾が飛来した。狙撃の衝撃に耐えられず、黒住はよろめいて銃を <u>取り落とした</u> 。狙撃弾は狙い誤たず、かおりを楯にしていた黒住の、わずかに現れていた左肩に <u>当たったのだ</u> 。		
提示順序	取り落とした(前文)	当たったのだ(後文)
時間的生起順序	後続	先行
因果関係	結果	原因

3.1.3 継続と同時

継続相は＜同時性＞の機能を果たすが、同時に生じている事象間には因果関係がある場合もない場合もある。因果関係がない場合は「ノダ」文に言い換えられない。しかし、因果関係がある場合には、＜完成相＞の場合とは違って、「ノダ」文にいい変えてもよい場合がでてくる。

次の2つの例を比較されたい。最初の例では、複数の事象間に因果関係はなく＜同時性＞のみであるため「ノダ」文には言い換えられない。一方、後者の例では、「雪が小山のような吹き溜まりを作っていた」という事象が、前文の事象「行く手をはばまれた」を条件づけているため、「作っていたのだ」に言い換えてもよい。

・深い秋の静かな晩だった。沼の上を雁が啼いて通る。妻君は食台の上に洋燈を端の方に引き寄せて其下で針仕事をしている。良人は其傍に長々と寝ころんで、ぼんやり天井を眺めていた。

二人は永い間黙っていた。(好人物の夫婦)

・谷の川底から、70メートルも進んだだろうか。そこで富樫は、厚い雪の壁に行く手をはばまれた。周囲の木々から落ちた雪が、そこで小山のような吹き溜まりを作っていた。(ホワイトアウト)

以上の事から、＜同時性＞の場合には、次のようになっていることが分かる。

- ①複数の事象間に因果関係がない場合:「ノダ」文は使用できない。
- ②複数の事象間に因果関係がある場合:「ノダ」文の使用は任意である。

以上の例は＜条件づけられ(結果)―条件づけ(原因・理由)＞のテキスト構造であったが、無標形式の場合には、次のような、＜条件づけ(原因・理由)―条件づけられ(結果)＞のテキスト構造であってもよい。このような、前文＝＜条件づけ(原因・理由)＞、後文＝＜条件づ

けられ(結果)>というテキスト構造の場合は、「ノダ」文は使用できない。

・「どこか場所を変えましょう。飲み屋なら開いているが…」

桐野はまだ話したいらしい。守屋は疲れていた。早く下宿に帰って寝たかった。

(蒼氷)

次の順序にすれば、「ノダ」の使用は可能になる。「ノダ」形式は、前文が表す事象に対する原因・理由の説明というテキスト構造に限定される。一方、<同時性>という時間構造における無標形式の文は、このような限定は無く、条件づけ(原因・理由)を表す文が前文に来て後文に来てよいのである。

・桐野はまだ話したいらしい。早く下宿に帰って寝たかった。守屋は疲れていた。

○疲れていたのだ

以上をまとめると、次のようになる。

同時性という時間構造に因果関係も複合化されている場合、

①<説明され(結果)—説明(原因・理由)>のテキスト構造では、「ノダ」文に言い換えてもよい。

②<説明(原因・理由)—説明され(結果)>の場合は、「ノダ」文に言い換えられない。

3.1.4 一時的状態と同時性

アスペクト対立のない状態動詞や形容詞述語は、時間的限定性のある、静的な一時的<状態>を表す。この<状態>の場合でも、継続相と同様に、前文が表す事象「ぼんやりしていた」との時間関係は<同時>になる。次の場合は、「ノダ」文は不可である。

・その夜は帰宅するり、着替えもせずにはベッドに倒れ込み、貴子はしばらくの間、ただぼんやりとしていた。とにかく、足がだるくて、爪先が疼くように痛む。腰も痛かった。

(凍える牙)

次のように、同時性という時間関係に、前文との間の因果関係が複合化されている場合は、継続相形式の場合と同様に、「嬉しかったのだ」にしてもよい。

・「そうか、戻っていたのか」

院長は戻ってきた少年をあたたかい目でみた。脱走した少年が自分の意志で戻ってきたことが院長には嬉しかった。

(冬の旅)

ただし、無標形式の場合は、継続相の場合と同様に、次のような順序も可能である。このようなテキスト構造では、「ノダ」文はできない。

・「そうか、戻っていたのか」

脱走した少年が自分の意志で戻ってきたことが院長には嬉しかった。院長は戻ってきた少年をあたたかい目でみた。

3.1.5 パーフェクト(perfect)と時間的後退性

シテイタ形式が表す<パーフェクト>は、テキストの時間構造において<時間的後退性>として機能する。これは、事象の生起順序に沿ったアイコンニックな提示ではない。このこと自体に、事象の生起順序に沿った描写記述ではなく、<背景的説明性>の機能がでてくる。従って、パーフェクトの「シテイタ」形式は「シテイタノダ」に言い換えることができる。次の場合の「後逸していた」は、前文「千円札を渡した」を条件づける、時間的に先行する事象を表しているがゆえに、「後逸していたのだ」に言い換えてもよい。また、「後逸したのだ」でもよい(「後逸した」は不可である)。

・最初はハドソンだった。ハドソンはやって来たのがコーチだと知ると、黙って財布の中から千円札をとりだして渡した。彼は昨夜のゲームで、二回裏にサードからの送球を後逸していた。[○後逸していたのだ=後逸したのだ](監督)

逆に、次の「運び込んだのだ」は、パーフェクトを表すシテイタ形式の「運び込んでいた」に言い換えてもよい。

・窪沢が驚いたように、壁を見た。ピッケルはなかった。明け方、小宮が、桐野の持物を全部まとめて、守屋の私室、つまり桐野の臨時宿泊所に運び込んだのである。(蒼氷)

3.2 時間的限定性のない場合

時間的限定性のない事象(非一時的事象)の場合は、背景的説明になる。次の例では、前半には、時間的限定性のある事象の継起性が描写記述されているが、最後の2文は時間的限定性のない事象である。この2文は、「テレビのスイッチを入れた」という個別具体的な事象が、その時限りの偶発的な事象ではなく、照子の習慣によって条件づけられているものであることを説明している。従って「ノダ」に言い換えてもよい(ただし、「ノダ」文の連続は不可であり、どちらか一方になる)。

・夜になると。照子はいつも通り一人で食事をした。入れ歯の具合がよくないせいもあって、それほど食欲も出ないから、10分とかからない、簡単な食事だった。そのあとはもう、何もすることがない。明日の朝食の下ごしらえをして、家中の戸締りを確認して歩くと、照子は布団を敷き、寝巻に着替え、あとは寝床に入るだけになってから、テレビのスイッチを入れた。面白くても、つまらなくても、11時まではテレビを見て過ごす。テレビがいちばんの楽しみ、今の照子の、最高の友達だった。(凍える牙)

時間的限定性のない事象は、下記のように、動詞述語、形容詞述語、名詞述語の場合があるが、すべて「ノダ」文に言い換えることが可能である。が、無標形式自体で＜背景的説明＞の機能をはたすことができるとすれば、わざわざ「ノダ」という有標形式を使用しなくてもよいであろう。特に名詞述語の場合には、無標形式の方が適切であるという印象さえ受ける。この点については後述。

＜動詞述語の場合＞

・俊三は足もともリュックサックの中から、空港で買いこんだコニャックを取り出した。

プラスチックの小さなコップにつぎ、黙って萌にすすめてきた。昔から萌が酒に強いことを知っている。(渴く)

＜形容詞述語＞

・「あのタコ!」

馬鹿野郎とまでなじられたことに腹が立って、雅子は小さな声で言い捨てた。居丈高な中山が大嫌いだった。(OUT)

＜名詞述語＞

・「実はこの間島田に会ったんですがね」

「へえ何処で」

姉は吃驚したような声を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい仰山な表情をしたがる女であった。(道草)

そして、無標形式の場合では、常に、上記のようなテキスト構造である必要はない。次のように、＜理由(条件づけ)—結果(条件づけられ)＞のテキスト構造も可能である。この場合は、「ノダ」は使用できない。

・俊三は足もともリュックサックの中から、空港で買いこんだコニャックを取り出した。

昔から萌が酒に強いことを知っている。プラスチックの小さなコップにつぎ、黙って萌にすすめてきた。

以上の点は、同時性の場合と同じであり、むしろ、＜条件づけ(原因・理由)—条件づけられ(結果)＞というこのテキスト構造の方が、因果関係の説明のし方が自然であるとも言える。次の場合は、すべてこのテキスト構造である。そして、この場合には、「ノダ」文が使用できないとすれば、時間的限定性のない場合は、ますます「ノダ」文を使用する必要性がないことになる。(このテキスト構造は、「図書館では夜間ヒーターを切ってしまうので、閲覧室は身を切るような寒さだ」という複文構造になる)

・その夜、滝子は図書館のガラんとした閲覧室で、ひとり残業をしていた。

図書館では夜間ヒーターを切ってしまう。閲覧室は身を切るような寒さだ。

手をこすりながら本の整理をしていると、コツコツと靴音が聞こえた。

(阿修羅のごとく)

・ある朝、霞ヶ関の三年町の坂を上っていくと、課長が前を歩いていく。

役所でいつも威張りくさっている課長が、自分より下に見える。

馬の脚は、人間よりは早い。やがて課長と並び、いよいよ追い抜くことになった。

(小説 吉田茂)

・「いったい、大臣は気でも狂ったんですか」

鷹部は血の気の多い男であった。声をふるわせていった。 (官僚たちの夏)

以上から、次の事が分かる。

①時間的限定性のない無標の文自体に背景的情報の提示(原因・理由の説明)の機能がある。そして、このような背景の説明の文は、説明されの文の前にきても後に来てもよいのだが、＜説明—説明され＞の構造の方が自然で頻度も高いように思われる。

②時間的限定性のない事象を表す無標形式の文自体に背景の説明の機能があるとすれば、「ノダ」形式は義務的ではなく、上記のようにテキスト構造も限定されていないため、「ノダ」形式の使用頻度は低い。(佐藤(2001)参照)

3.3 2つのタイプの説明の構造

以上のことから、無標形式の文を「ノダ」文に変えても、意味機能が変わらない場合とそうではない場合があることが分かる。そして、これには、次のように、まずは、時間的限定性の有無が相関している。

(1)時間的限定性のない事象の場合：

- ・背景の説明としての機能を果たす。
- ・説明の構造は＜説明され—説明＞＜説明—説明され＞のどちらでもよい。
- ・＜説明され—説明＞のテキスト構造の場合にのみ、「ノダ」文に言い換えてもよい。

(2)時間的限定性のある事象の場合

(2・1)完成相の場合

・ものがたりの時間を前進させる継起性という最も重要なiconicな時間構造を形成する。(Givón (2001)等を参照)

・複数の事象間に因果関係がない場合は、「ノダ」文に言い換えられないだけでなく、因果関係があっても、iconicなく先行・原因—後続・結果＞の構造であるため、基本的に「ノダ」文に言い換えられない。

(2・2)継続相・状態の場合

- ・複数の事象間の同時性を表す時間構造を形成する。
- ・因果関係がある場合もない場合もあるが、因果関係があり、＜説明され(結果)—説明(原因・理由)＞の構造の場合にのみ「ノダ」文に言い換えてもよい。

従って、次の点が重要である。